

「農村へ出かけよう」①

林 美香子

(北海道大学客員教授)



林 美香子
(はやし みかこ)
キャスター・北海道大学客員教授
北海道大学農学部卒業後、札幌テレビ放送アナウンサーを経てキャスターに。
番組出演のほか執筆活動も。「農村と都市の共生による地域再生」の研究で北海道大学にて博士(工学)を取得。慶應大学大学院SDM特任教授を経て顧問。著書に「農村へ出かけよう」(寿郎社)「農都共生ライフがひとを変え、地域を変える」(寿郎社)など。

「カーピアセロム」読者のみなさんは、農村地帯のドライブにお出かけの機会も多いだろう。都市に住む人たちが農村を訪れることが農村の活性化に大きな力を発揮すると考えている。農村の活性化について、私が取り組んでいる「農村と都市の共生(農都共生)」の視点から、二回にわたり紹介したい。

「農都共生の大切さ」

少子高齢・人口減少の成熟社会を迎え、新しい地域活性の在り方が問われている。急激な都市化や工業化、縦割り行政の影響などもあり、農村と都市の地域政策を個別に考えることが多かった日本だが、地域活性のためには、農村と都市をトータルに捉える「農都共生」が大切と考えている。都会の人が、農家民宿・農家レストラン・農業体験などで、農業・農村の持つ癒しなどの多面的機能を楽しみ、また、農家が都会で直売所を運営するなどの活動を通して、交流や連携を重ね、農村と都市の相互理解を深めていくことが、農都共生の推進に繋がり、農村と都市双方の地域活性化力を発揮する。

都市住民のライフスタイルが変化し、

「物の豊かさ」より「心の豊かさ」を重視する人や、レジャー・余暇に生活の力点を置く人が増え、農業・農村への関心が高まっている。今こそ、農都共生を推進する絶好のチャンスである。

都市側には、楽しみや心の豊かさなどの恩恵があり、農村側には、いきがいや副収入をもたらすなど、双方への効果がある。癒しや楽しみを提供してくれる農村に対して、都会の人たちが農村でお金を使うことは大きな経済効果をもたらす。疲弊する地方にお金が循環する仕組みのひとつとして、グリーンツーリズム(農村地帯で過ごす休暇など農都共生の活動をすすめたい。「経済の循環」と同時に、「情報の循環」「人材の循環」が起こり、農村・都市の双方に活力をもたらす、地域の持続可能性に大きな力となる筈だ。

「農村」コミュニティビジネス

グリーンツーリズムや最近では農泊として考えられることの多い農家民宿・農家レストラン・農業体験・農産直売所などを、地域の課題解決に役立つ「農村コミュニティビジネス」として捉え直してはどうだろうか。

農村コミュニティビジネスとは、地域資源、人材、ノウハウ、施設や資金をいかながら地域課題の解決にビジネスの手法で取り組むものであり、地域に新たな雇用を作り出し、働きがいや生きがいを生み出し、地域コミュニティの活性化につながるものである。グリーンツーリズムというと、観光面が強調され、農村側が都会に提供するものという印象を持つ人も多いが、「農村コミュニティビジネス」として捉えることで、より社会的意義が感じられ、地域に密着したものになると思う。

農業・農村には、農地をはじめ、山や川などの自然、農畜産物、農村景観や農村文化などたくさん地域資源があり、まさに宝の山である。すがすがしい空気が美しい星空など、地元の人には当たり前になつてしまつていいるものもあるだろう。

これらの地域の宝を組み合わせることで、多様な農村コミュニティビジネスが生まれる。農産直売所、農産加工品の製造・販売、農家民宿、農家レストラン、農業体験や加工体験…実にさまざまな業種が考えられる。都市側のニーズという

視点も忘れずに、コミュニティビジネスを創出して欲しい。

食をテーマにしたコミュニティビジネスは、裾野が広く、可能性も大きい。月に何度かの営業や季節営業など、臨機応変な方法も考えられる。全国各地の農村コミュニティビジネスで、女性の活躍も目立って増えてきているのはうれしいことだ。

「農村へ出かけよう」

フランスやイタリアなどのヨーロッパでは、都会人の楽しみとして、豊かな食のある農村を訪れることが暮らしの中に根つき、それらの行動が、農村に経済効果をもたらす、地域活性につながっている。パカンスや週末に農村を訪れ、美しい田園風景の中で、地元ワインと郷土料理を楽しみ、ゆったりとした時間を過ごしている光景は、暮しの一部として農都共生生活を楽しんでいるとも言える。時間をかけて高齢社会になつたヨーロッパならではの、暮らしを楽しむ時間消費型のライフスタイルの奥の深さもあるのだろう。成熟社会を迎えた日本でも、農都共生による地域活性の実現を切望している。

(つづく)

「未来の若者へ、明日の北海道へ告ぐ!」

一隅を照らす人になれ!

一人2回連載。

誠実に学び続ける姿勢を忘れない

(株式会社サポルテ代表取締役)

塚田 康祐



塚田 康祐
(つかだ やすひろ)
1959年札幌生まれ、札幌育ち。北海道大学法学部卒業後、人材総合支援会社(アデコ)で支社長・エリア長の職を経て、2002年にビジネスコーチ&経営コンサルタントとして独立。特に中堅社員から管理職までの人材育成研修を中心に、全国の業種業界問わず様々な企業の「自立型人材」の育成を支援している。

誠実に学び続ける姿勢が未来を切り開く

私は何歳になっても学び続けることが重要だということを、ビジネス人生を通して痛感しています。学ぶのは学生ままで、社会人になつたらもう勉強しなくていいのだということ、すっかり安心しきつているビジネスマンを沢山見てきました。そして、学ばぬ彼らが、その後、どのような状況になつていったかも目の当たりにしてきました。率直に言えば「淘汰された」ということが適切な表現かもしれません。

決して、皆さんを脅しているわけではありません。逆にとらえれば、学び続ければ、必ずどんな環境下でも生き残れるということに他ならないということなのです。

これからは、業界を問わず企業を取り巻く環境が激変する時代です。

3年前に成果を出せた考え方やスキルが、全く通用しないくらいスピード化が進んでいるのです。だからこそ、学び続ける者だけが、本当に自分のやりたい仕事を、遣り甲斐を持って実践していくことができるのです。

では、何について、どのように学ぶことが有効なのか、私自身の実践してきた

とが参考になるかもしれないので、お伝えしたいと思います。

・自分の業務の専門性を高めるために学ぶ

例)自分の業務に関する専門資格を取得する

・自分の将来に向けて可能性を広げるために学ぶ

例)興味ある業界・業種の情報収集をする

・自分の人間力を高めるために学ぶ

例)歴史の本を読む、教養を高める

上記のように何でもいいのですが、上司や先輩から言われたから学ぶのではなく自主的に学ぶことが重要です。一般的にはこれを自己啓発と言います。

100人のビジネスマンがいるとしたら、自己啓発をやっている人は5%未満だと思えます。だからこそ、差が付くのです。学ぶ習慣を身に付けることで、あなたのビジネス人生に大きな成果をもたらすことは間違いありません。

今からでも決して遅くはありません。どんなに小さなことでも構わないので、学び始めてみてください。

「悔いを残さない」

私たちは人生の半分以上の時間を仕事に費やしています。だからといって、お金のためだけに仕方なく働くのは、もったいないと思いませんか?

私はビジネスコーチとしてさまざまな企業様を訪問しますが、楽しそうに働いている社員は1割ぐらいで、その他の覇気のない、疲れた表情の皆さんを見て、いつも辛い気持ちになります。

実は私は20代で3年ごとに3社の転職を繰り返しました。そして30歳から43歳まで13年勤めた会社も辞めて、起業するというサラリーマン人生でした。他人からは「コロナ仕事が変わって、根気のない飽きっぽい人間」だと思われていました。

でも、私の22年間のサラリーマン人生に全く悔いはありません。

何故なら「自分の決断に悔いを残さない」というのを、私がとても大切にしている考え方だからです。

私が25歳で3年間務めた1社目の会社を辞めると決めた時、上司からは「この会社を辞めたら絶対に悔いを残さず」と真剣な表情と厳しい口調でにらむように言われました。

その時、自然と私の内側から湧き上がってきた返答したのが、「辞めないで悔いを残すより、自分で辞めると決めて、その結果として悔いが残ったとしても、そのほうが良いのです」という言葉でした。

その後も、会社を辞めるという場面だけではなく、様々な決断の場面ではこの「悔いを残すか、残さないか」を判断基準にするようになりました。

ビジネス書などでは「やつた後悔は消えるけれど、やらな後悔は消えない」と書かれています。(当時の私は、このような言葉は全く知りませんでした)

自分で決断して行動したことは、何らかの結果が出ます。失敗しても学びを得られ、その経験を糧に改善して次の行動につなげれば、更なる成功に近づきます。だから、今でも私は会社を辞めたことについては、どの会社も一切悔いは残っていません。

逆に、もし決断をできずに会社に残っていたら、失敗はしないかもしれませんが結果も出なかつたと思うので、後から「あの時に辞めていたら、どうなったか、何故あの時に辞めなかつたのか」と悔やみ続けて、一生後悔が残つたと思います。たった一度の人生です。全て最終的に決めるのは、あなた自身自身です。